今日のイラスト 311　「 イラストでたどる萩往還⑦　明木宿 」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 07　明木宿

唐樋札場
明木宿
萩
山口
英雲荘（三田尻御茶屋）
防府

文・イラスト＝古谷眞之助

明木は明木川沿いに開けた萩往還最初の宿駅である。江戸期の地理歴史書「防長風土注進案」には、総戸数73軒で、人夫19人、馬30匹を常設していたと記録されている。駅には目代役が定められ、駕籠や馬の手配と賃銭の徴収役を務めていた。

イラストは現在の明木である。ここは明治24年にほぼ全焼したが、たまたま直前に自宅を瓦屋根の土蔵造に改修した藤井家のみが焼け残ったことから、江戸期には3軒しかなかったという瓦屋根が広く普及し、瓦には石州瓦が多く使用された。因みに藤井家出身で二代目村長となった藤井清は、井上馨に見出され、福沢諭吉門下生となって西洋式簿記の導入に貢献のあった人物である。

今年に入って語り部活動は特に活発になった気がする。例によって細かく記録しているのだが、萩往還のガイドが 15 回、うち３回が外国人である。いつもの年よりも多いのは或る３団体からガイドをご指名いただいているせいもある。もちろん勧誘を行ったのは自分で、昨年から４回、２回、２回と行ってきていて、萩往還踏破を目指している。その他、山口市の要請によって市内循環バスにガイドとして１度乗ったが、この時は香港からの４名とフランスからの１名も乗ってきた。海外からのお客様のガイドは年内あと２回ほどありそうだ。それに加えて萩往還の清掃活動が３回、11 月にはもう１回控えている。また研修会も２度参加した。さらには珍しく依頼のあった萩往還の講演会も１回行った。それ以外に、今年から企画部会長を拝命したので、会議がこれまで９回あった。そんなこんなで、有難いことに語り部活動だけでも色々と忙しい。

さて、このシリーズも７回目となった。今回は萩を出発して最初の宿駅（ 宿場町 ）の明木（ あきらぎ ）である。街並みは石州瓦の家が目立つが、実は明治に入って大火によってほとんどが焼失している。そのため中心地にあるお寺も再建されたもので、あまり絵にならないから、イラストはウォーキングを楽しむ夫婦、また配達中の郵便局員を配して現在の街並みを描き込んでみた。たまにはこういうイラストも良いだろう。実は、語り部の会のこれまでガイド実績 990 件を分析してみると、明木を目的地とするコース、明木を出発点とするコース、明木を経由するコースが圧倒的に多い。その理由は、ここには整った駐車場と乳母の茶屋という立派な専用の休憩所があること、ここから佐々並方面に進めば、萩往還の風情の筆頭、石畳が残り、気持ちの良い渓流沿を歩く一升谷があること、萩方面に向かえば悴坂の駕籠建場、一里塚と歴史的遺物があり、かつ道の駅「萩往還」があって、そこにはミニ博物館や食事、買物など楽しめる施設が揃っていることが挙げられるだろう。一昨日にもここから萩の出発点まで 12 名のグループをご案内し、来月海外からの２組もここを経由する。ということで、明木は語り部にとっても重要な場所なのである。（ 2019.10.25 記 ）